

国分寺のおかしむかし

伝承シリーズ その2 ～白明坂(しらみざか)～

前号から国分寺市に伝わる伝承、昔話をシリーズでお伝えしている第2回は、内藤一丁目～二丁目にある「白明坂」^{しらみざか}に関する伝承です。

この辺りには、国分寺崖線を下る急な坂があり、「白明坂」と呼ばれ、坂の名称の由来を書いた看板もあります。*多摩蘭坂下から少し北へ入ったところ。

1333年(元弘3年)鎌倉幕府を倒すため上野国(現在の群馬県)で兵を挙げ連戦連勝してきた新田義貞は、分倍河原に布陣する幕府軍に夜討ちをかけることにしました。義貞は敵が警戒している鎌倉街道を避けて、里人しか通らない名もない道を選び南下しました。このような小道を大勢で歩くのはたいへんで、兵たちがぐたびれはてたとき、道は下り坂になり、やっと武蔵野の南はずれに出ました。義貞はこの坂で兵たちを休ませ、戦いに備えて食事をさせました。いよいよ分倍河原の敵を目指して出発しようとしたとき、鳥が鳴き、皆がいっせいに東を見ると空が白々と明け始めているのです。武蔵野を超えるのに時間がかかりすぎ、夜討ちをかけられなくなってしまいました。それからこの坂を里人は「白明坂」と呼ぶようになりました。



*この伝承は、明治政府が編纂した地誌(皇国地誌:未完に終わり、かつ多くは関東大震災により焼失。)に記載があります。

*「太平記」によれば、義貞の挙兵は5月8日、そのわずか2週間後の5月22日、鎌倉に突入、鎌倉幕府は滅亡します。